個性派の道具たち

ほんの10数年前まではせっせと使われていた道具も、今はひっそり眠っています。そんな道具を、大勢の人に見てほしいから、珍らしい物だからと、市立博物館へ寄贈してくださいます。

どんな人がつくってどんな風に使われたのか、残された個性派の道具たちにスポットを当て、今回からシリーズでお送りします。

①

●おばあちゃんのひな形着物

中里の
飯島昭代さん

「これが、お宮参りの着物で比翼仕立ての単衣本重ね。こちらが、一ッ身。かみしもにはかま。母は、いろいろつくって、裁ち方や縫い方を練習したんでしょうね。」

寄贈していただいたひな形着物は、四十点。今は亡き飯島綾路さんが、東京裁縫専門学校当時にせっせとつくり続けたものです。綾路さんは、明治二十九年生まれ。専門学校入学は大正の初めだったといいますから、ひな形着物は、どれも七十年以上はたっています。

「飯島の家は、中里陣屋と呼ばれていましたから、古文書や古い物がたくさんあるんです。蔵を整理していてこれを見つけました。」

残されていたひな形着物はとてもていねいにつくられ、形は少しも崩れていません。

着物は、私たちの生活の歴史とともに移り変わってきました。洋服万能時代の今、すっかり影をひそめてしまいましたが、小さな形に込められた大きな魂が伝わってきます。

ぼくの作品 わたしの作品

四月に、一年生になった田子浦小学校のお友達は、まいにち元気に、うんどう場であそんでいます。

たのしい、うんどう場の絵をかいてくれました。

もとはششんいち

うんどう場には、たくさんゆうぐがあるよ。

たかい橋にのぼると、さいしょはこわくてドキドキしちゃった。いまでは、はしってわたれるようになったよ。

えんどうまさこ

うんどう場は、はだしで走ると、とてもきもちいいよ。だって、できたてなの。

わたしは、うんていやタイヤとびをして、まいにちあそぶんだよ。

---

⑰

しいまいまグループ

仕事とサークルを両立

「点字サークルあい」

△お互いに教え合いながら点訳しています

平成元年4月にできて、やっと1年になったばかりの、まだまだ若いサークルです。

会員は、昭和63年度の点字講習会を、半年間受講した中の5人で出発しました。その後、平成元年度の受講生5人が加わり、現在10人です。

毎月第2日曜日の午後1時から3時まで、定例会を開いています。文章を点訳するには、いろいろな難しい決まりがあります。そのため定例会は、勉強会も兼ねて、先輩にも来ていただきます。勉強をしながらの点訳ですがこれまでに「身障者福祉連合会の名簿」「講習会の資料」「日蓮宗の経本」などをつくりました。

会員の大半は、仕事を持った主婦ですので、無理をしないで、少しでも多くの点訳をし、みなさんに喜こんでいただけたらと思っています。

また、息の長いサークル活動を目指して、会員みんなで頑張っていきます。

問い合わせ 辻 敏子 ☎61－3938

こちら編集室

そろそろゲンジボタルが、飛び始めるころです。昔、田んぼの水路などでたくさん見られたホタルも、農薬の普及や水の汚れで、いつしか見られなくなってしまいました。

でも最近、「原田、吉永、岩松にいるよ」という、うれしい話を聞きました。今年は捜しに行こうかな。

発行・富士市役所 富士市永田町1丁目100番地 ☎51－0123
編集・総務部広報広聴課

人口 224,049人 男 111,472人 女 112,577人
世帯数 66,184世帯
（5月1日現在）